最低限の「心の準備」を
葬儀のイロハ学習会に20人

広島・東区

広島東区生活と健康を守る会は7月17日、「葬儀」についての学習会を開催。会員や家族ら20人が参加しました。講師は会員で葬儀社・㈱玉屋社長の児玉賢司さん、県連の共同墓管理組合の牛尾清彦事務局長です。

葬儀の手順などを学ぶ参加者

この学習会は、身内や知人が亡くなるなど「いざという時に慌てないよう、具体的手順を知ろう」と、企画したものです。

児玉さんは、「町内会の役員などが葬儀の準備をしてくれた時代もあった。今は多くの場合、葬儀屋が代行している。日ごろからいろいろな情報を集めて、いざという時にはこの葬儀屋に頼もうと決めておくと安心」と話しました。

牛尾さんは、共同墓の歴史などを紹介しながら、現在、利用登録者が180人、11年間の納骨が131人と現状を紹介。また、納骨の手続きとして「墓のある久蔵寺と打ち合わせて日を決めてもらい、事務局に連絡いただくと『納骨台帳』を作って納骨します」と手順を説明。また、納骨の際「火葬許可証」が絶対に必要だと強調しました。

学習会で分かったことは、①信頼のおける葬儀屋にまず連絡。その際、親族の間で食い違いのないように、よく話し合っておく。②1人住まいの人が倒れている場合、死亡が確実のようであれば110番で警察に連絡。生き事務局に連絡する。③納骨の場合は、まず久蔵寺に連絡し納骨の日を決めてから事務局に連絡する。④生活保護利用者は、「葬祭費」が基準額で20万6000円支給される。骨壷、寝棺、寝台車、霊柩車、遺影写真、死亡届け、簡易祭壇、花束の費用なども含まれています。

（日下健二通信員）

片付け手伝い
「また来てくださいね」

神奈川・鶴見

一人暮らしの75歳女性を2月に集金のため訪問。糖尿病を抱え、家の中を片付けられず大変な状態でした。

正常な生活をするにはどうするか…。介護申請をして、ケアマネージャーさんと相談し、訪問。支援課・ワーカー、地域ケアセンター福祉士などと、班としてどうしたらいいか、本人の考えを言ってもらい、それに沿ってお手伝いすることになりました。

本人とケースワーカーの信頼関係もできたと思います。

片づけが始まり、6月末で終了。みんなの力を出し合い、各担当部署の連絡体制で対処できたと思います。

家が片づいてから、本人からの「また来てくださいね。見捨てないでね」という言葉に胸が詰まりました。

家で家族と会うこともできました。

この経験で、「これが守る会」と実感しました。

（金山和子さん）

友だちできてよかった！　手伝った仲間（右）と

問題点を学習
「国保をよくする会」立ち上げ

東京・大田

解説する中央社保協・山口事務局長

大田社会保障推進協議会は7月25日、消費者生活センターで「国保問題学習・交流会」を開催。会場には大田社保協に加盟する大田生活と健康を守る会をはじめ、各団体から28人が集まりました。

学習の前段は、中央社会保障推進協議会の山口一秀事務局長の基調講演です。山口さんはさまざまな資料を駆使して、国保問題の現時点での問題と運動の方向を分かりやすく話しました。

医療保険制度は3種類あり、1億2850万人（2014年3月末）が加入。うち、約30％が国民健康保険の加入者であること、国保加入者の職業構成が1965年からの約50年で大きく変化し、今は無職（主に年金者）が43・9％、被用者（労働者）が34・4％、自営業が14・5％になっていること、この層の人々の所得水準は一様に低いことも指摘し、国保財政は、国や自治体の負担・援助の前提がなければ成り立たない社会保障制度であると強調しました。

また、国保の財政運営が来年度から東京都に移り、大田区は保険料の徴収を担い、都と大田区が連携して国保行政を行うようになること、保険料のさらなる値上げも予想され、広域化で懸念される問題で運動が緊急に求められると強調しました。

講演を受けての質問や意見では、保険料の年金からの天引きはひどい、国保に傷病手当を設けてほしい、国保運営協議会への保険料引き下げを求めよう、などの声が出されました。

交流を受けて、大田社保協としての行動提案を野口修二事務局長が行い、大田の「国保をよくする会」立ち上げの提案が了承・確認されました。

（武政良久通信員）

定例会議で決定
独自「ニュース」8月創刊

埼玉・鶴ヶ島

「ニュース」創刊へ議論が白熱

鶴ヶ島生活と健康を守る会は7月21日、鶴ヶ島市南市民センターで定例の会議を行いました。前回から「生健会ニュース・鶴ヶ島版」発行に向けて取り組んできました。どのようなニュースを作るか、4人で企画会も開いています。

今回は創刊号ということもあり、たたき台についてみんなで討議。白熱した意見が交わされました。

「市民の声を集め、なるべく多くの人に市の現状を知ってもらいたい」「同時に、この会も浸透させたい」。

小一時間ほど費やして、8月から創刊するめどがつきました。

毎回みんなが1つのことに向けて熱く討議し、団結していく生健会を通して、市民の輪が広がって行きます。

運動も、このような点から広がって行くのではないか、定例会終了後、みんなの笑顔が光っていました。

（増田育子通信員、写真は増田恵一さん）